

百神百年大戦

story by awamura akamitsu
Illustrations by kakage

あわむら赤光 イラストかかげ

火薙

ひやくしん
ひやくねん
たいせん

GA文庫

第一章 選ばれた少女

その少女のフルネームは、腰下まで伸びた彼女の髪同様に、とても長つたらしいものだつた。

ミリアルージュ・カレンシア・アーダヴァアイルト・エーケスター。

——と、いうのがそれだ。

細かく意味を見ていくと、「エーケスター」王國を統治する「アーダヴァアイルト」家の正統で、正妃「カレンシア」の息女である「ミリアルージ

ユ」となる。

つまり、彼女は王女様だつた。

(王女様のはずなのよねえ!? しかも第一の!)

生まれてこの方、十六年。もう何度そんな風に、自問しただろうか。

彼女は、王宮の外壁を汚すラクガキを、一生懸命、掃除していた。

別に王家に対する誹謗中傷や、社会的鬱憤から出た風刺の類、あるいは冒瀆的新思想の自己陶酔的な啓蒙文が書かれているわけではない。

今や、そんなことを書いてくれる者すら、王宮な

んかには寄りつかない。

近所の悪ガキどもが暇に飽かせて書き殴つた、正真正銘のラクガキだ。イタズラだ。

ただ、量が半端じやなかつたので、端から端まで消すのが骨だつた。

水を湛えた真鍮のバケツへ、乱暴にモップを突つ込んでは、どつこらせー、よつこらせー、と壁の汚れをこすり落とす。

その豪快な仕種と手慣れ感は、とても深窓の王女様のそれではなかつた。

せつかくの愛くるしい顔も、ため息が出るほど美しい光沢を帯びた髪も、台無しも台無し。

そもそも彼女は今、ほつかむりをして美貌も髪も隠していた。

服装も汚れていよいよ、女官たちが着るお仕着せ姿。

朝も早よから精を出していると——

「姫様！」

「ミリア様ー！」

大きな呼び声が、正門の方から聞こえた。

城付の兵士たちの声だつた。

アーダヴァアイレルト王家では、正式な場での名

乗りのみ、フルネームを使うのが礼儀作法とされる。

普段は愛称を使うし、家臣たちにも呼ばせる。

ゆえにミリアと呼ばれた彼女は、掃除の手を止めずに、声のした方を振り返った。

三人の兵士が、息せき切つた様子で走つてくると、「おやめください、ミリア様！　そのような雑事、わたくしどもがやりますっ」

「そうです！　オレたち兵士なんて毎日、暇なんですから！」

おろおろとした様子で訴えてくる。

ミリアは彼らの気持ちや誠忠はうれしく思いつつも、

「いいのよ。こんな仕事、それこそあなたたちにはさせられないわ」

一旦^{いつたん}、モップを壁に立てかけ、腰に手をやりながら断言した。

「し、しかし……」

「いいんだつてば！　ウチは超貧乏だから、女官も兵士もろくに雇えないわけ」

自分で言つて嫌になる台詞^{せりふ}だが、事実だ。

城で働く全員を合わせても、たつたの四十人ぽっち。

百年前なら「そんな王家があるかよ！」と笑い話である。

「なのに城だけはクツソ広いしね。万年、人手不足なんだから、こんな雑事は私がやるわよ。とい

うか、我が家に仕えてくれるあんただちに、こんな雑事はさせられない」

「姫様……つ」

「ミリア様つつ」

兵たちは感激しつつも、だがしかしどいつた様子で、

「お言葉はありがたいのですが、わたくしたちが暇なのは事実なんです」

「この国は平和すぎて、兵士の仕事なんてほぼ皆無ですし……」

「だから、ここは我々に任せて……」「だまらつしやい！」

今の台詞は聞き捨てならず、ミリアは兵士たちを喝破した。

「あんたたちの仕事は、ラクガキ掃除なんかじゃないわ！ 民の前で威張り腐つて、我が王家の権威を高めることでしょ！！ わかつたらさつさと正門で通行人にガン飛ばしてなさい！」

「ひ、姫え……」

「それはあんまりな仰りようかとお……」おつしゃ

「しかも権威と仰るならば、第一王女たるミリア様がこんなところでラクガキ掃除をなさるのは、外聞が悪くなりませんか……？」

「だから私、ほつかむりして隠してるのでしょ？」

「……」

ミリアの主張を聞いて、兵士たちは一様に押し黙つた。

その表情には「全然、隠せてないです」「むしろ城下町中に知れ渡つてます」と書いてあるのだが、ミリアは気づかなかつた。

「とにかく、薄給をさらに薄つすくされたくなかつたら回れ右！」

「ははは……これ以上、薄いのは勘弁していただきたいですな」

「姫様には敵かなわない」

「いや、恐い恐い」

兵士たちはどこか温かみのある苦笑いを浮かべ
つつ、結局は従つてくれた。

ミリアも安心して、掃除の続きを戻ることがで
きる。

（そうよつ。これ以上、我が家が舐なめられて堪たま
るもんですか！）

唇を尖とがらせ、憎しみすら込めてモップを壁にガ
シガシやる。

ただし、ラクガキの主への恨みではない。

まあ、少しもないと言えば嘘うそになるけれど、子
どもたちが本当に楽しそうに遊んでいる様が、思
い浮かぶようなラクガキなのだ。

正門から南西の角まで五百メートルはある壁を、広々キヤンバスに使つて絵を描いたら、そりゃ気持ちいいだろう。

問題の根幹は、仮にも王宮の外壁が——王家の権威の象徴が、子どもたちの遊び道具にされていることだ。

アーダヴァイレルト王家の威光が失墜し、民に畏敬されていないということだ。

ゆえにミリアは、その原因を作つた連中を憎む！

ミリアが生まれる遙^{はる}か昔、天から神を自称する

生き物たちが降つてきだ。

その当時、この南大陸には大小、五十を超える国々が群雄割拠していくたどいうが、その尽くがわづかの間に、神々に屈服させられた。

デナーン最大最強のウェスパー・ラント帝国軍は、内陸部にあるベルベッファー平原に十万の兵を並べ立てたが、雨の神が起こした洪水の中に一瞬で呑み込まれた。

黒炎の神に恭順しなかつたホランド王国は、一夜にして都を灼熱地獄に変えられた。その炎は百年経つた今でも消えることなく、ホランド王の魂は成仏することもできず、紅蓮に包まれた城下を

彷徨さまよい歩き、己おのれの誤つた判断を嘆き悲しんでいる
といふ。

神々の力——すなわち『神威』に、対抗できる
國や人などこの地上には存在しなかつたのだ。
タイクーン世界はたつた七日で、その様相を一
変させた。

人々は國に屬し、王に恭順サンクチユアリするのではなく。
聖域サンクチユアリに屬し、神に信仰を捧げるようになつた。

では、王家はどうなつてしまつたのかといふと

神々は彼らを人類代表と認め、人々を束ねて政を行ふ機関として、最低限の自治権を認めた。

王権神授説を謳う王家は昔から多かつたと聞くが、まったく皮肉なことに、それが最悪の形で現実となつたのだ。

そう、最悪である。

神々は王家から、税を徴収する権利だけは奪つた。それらは代わりに神殿へ、喜捨として収められることになつた。

そして、その中から雀の涙ほどの金額を、王家に運営費として「神授」されるのだ。

下世話な話、唸るような金がなくては、権力な

ど実態を伴わない。軍隊ですらもう維持・経営できがないのだから、恐くもなんともない。

結果として——あらゆる王家は形骸化した。

ほとんど名ばかりの存在となつて、毎年「神授」されるお金を這はいつくばつて頂戴し、それをやりくりして生き永らえていいるというのが現状である。

民にもその実情はバレッバレだから、

「なんかエラソーにしてるけど、ぶつちやけ空気だよね」

「わかる。いてもいななくても関係ないよね」

「え、でも、私がしつこいナンパで困つたら、兵士さんが守ってくれたし、助かつたかな」

「まぢで？　ウチが泥棒に入られた時は、捕まえるまでどんだけ時間がかつてんのよつて……」

「まあ、たまには頼りになるけど、頼りにならない時も多いつて感じよねー」

「本当に困った時は、神殿に駆け込むよねー」

「まぢそれー」

みたいな感じに思われていて。

ミリアの生まれたアーダヴァアイレルト王家もまた、その例外ではなかつた。

極貧で、民からもニジンコみたいに思われていた。

(私だつて！ 私だつて！ あと二百年早く生まれてたら、蝶よ花よと育てられてたし、たっくさんの女官に傳かれてたし、好きただけおめかしして、好きただけお菓子食べて、毎日なに不自由なく暮らさせていたのよ！ こんな重いモップ持つてラク部、神々のせいつ!!)

恨みつらみを原動力に、ミリアはぜえはあ言いながら掃除を終える。

こんな情けなくなるような重労働でも、やり遂げればそこはかとなない達成感があるので、額の汗を拭いつつ、イイ顔をして王宮に帰る。

町のど真ん中にある平城だ。

ひらじろ

正門を抜け、往時は閱兵場も兼ねたという前庭を通つた先に、城の正面玄関がある。扉は縦五メートル、両開きで分厚い、威圧的なもの。

だが、もう長いこと建て付けが悪くなつたまま修繕もできず、開閉が大変だということで、常に開けつぴろげになつていた。

どうせ金目のものなんて、この百年の間にあらかた売つ払つてしまつたので、泥棒だつてこんな貧乏城を狙いはしない。

内装だつてあちこち痛んでいるが、修繕するお

金はないし。

女官たちの手が回ってないから、無駄に三つもある中庭なんて、雑草が生え放題だし。

これってなんとかして美味おいしく料理できないの？ そしたら食費が浮しもんくじゃない——なんて、ミリアは本気で周りに詰問したことあるし。

「ハア～、ため息しか出ないわ～」
も銅貨一枚出ないわ～」

真つ向から打ち壊しにかかる台詞を吐きつつ、城の厨房ちゅうぼうに向かう。

盛時には毎晩の如く晩餐会ごとばんさんを開いていたと伝え

聞くし、厨房もそれを支えられるだけの巨大なものがなのだが、今はもうその広さがかえつて虚しくなるほど、閑散としていた。

テーブルがいくつか置いてあつて、そこで作つたものをすぐ食べられるようにしてある。

ミリアももうメンドイし、無駄に他の部屋を使うと床がすり減るし、家具も傷むので、食事は毎日ここで済ませている。

使用人たちと一緒にになつても別に気にならない。というか、和氣藹々として楽しい。

「ハア～、お腹なか
としごろ空いた～」

食べ盛りの年頃としごろの、女子の本音を盛大に呴きな

がら厨房に入る。

すると、中に妹がいた。テーブルの端にちょこんと座つて待っていた。

ミリアより三つ年下の十三歳で、面影はよく似ている。ただ、髪は妹の方が短い。

名前はフイー・ネリーア。愛称はフイー・ナ。

ちなみにミリアの家族構成——というかこの城に住んでいる王族——は、病弱で政治の一線から退いている父国王と、平民上がりでガサツだけど夫を溺愛する正妃の母、それにこの妹を合わせた四人となつていて。

「あんた、まだ食べてないの？」さっさと準備して、

先生ンとこに行きなさいな」

ミリアは説教顔でフイーナに諭す。

「あたしだつてお腹、空いたもん。でも、トリモンが風邪で休んでるの。それで姉様を待つてたのよ」

最近ますますこまつしやくれてきた妹が、したり顔で反論してきた。

「……まあ、それならしようがないわね」

トリモンは城の厨房を一手に取り仕切る料理人だ（というか二人雇う余裕がない）。

他の女官たちも料理はできるが、午前の仕事でいっぱいいっぱい。手隙になるのを待つていたら、

それこそお雇そひが来てしまう。

「じゃあ、私が作つてあげるけど、文句言わずに食べるのよ？」

「はーい」

返事だけはいいフライナを尻しり目に、ミリアは竈かまどの前に立つた。

五徳の上にフライパンを置く。

一方、竈の中には薪まきや炭の用意もない。完全に空つぽだつた。

ミリアは慣れたもので、右の人差し指を一本立てた。

そこには銀製の指輪がはまつている。

デザインは素つ気ないものだが、窓から差し込む朝日を受けて、神秘的な光沢を放つていた。

タイクーンの人々が、今や誰だれでも身に着けている装飾品だ。

その指で、ミリアは火の印字を切る。

同時に強くイメージする。

たつたそれだけの簡単な行為で——竈の中が発火した。

薪や炭といった燃料を一切使わず、ひどく安定した火力をフライパンにもたらしてくれた。まさしく魔法の如しだかつた。

神々は巫みみこ女を通して、《龍脈》から莫ばくだい大な地素ガイアを得るのだという。

だが、戦時以外は特に必要のないものなので、薄めて周囲に発散する。

しかもこれが、聖域サンクチュアリ一帯に行き届くほどのエネルギーになる。

それを指輪が受け止め、使用者の意思に応えて、ささやかな魔法めいた力を発現するという仕組みだつた。

ミリアも他の誰も、詳しい原理を知つてはいなが、便利に使つていてる。

部屋の中を明るくする。湯を沸かす。暑さ、寒

さを緩和する。風邪の症状を軽くする。などなど、生活に密接した様々な使い方ができるのだ。

指輪の効力は一年しか保もたず、人々は毎年、神殿に納税——もとい喜捨へ行つて、新しいものをもらつて帰る決まりになつてゐる。

「幸せの指輪」だと呼んでいる。

實際、この指輪なしにはもう、タイクーンの人々は生きていけないだろう。

神々が特に信仰を強要せずとも、人々が勝手に彼らを崇敬するのは、これが理由だ。これほど実感を伴う現世利益もないだろう。

ミリアはフライパンを火にかけたまま、貯蔵庫を漁つた。

中に収められた食材は全て、やはり指輪の力で、新鮮な状態のまま保たれている。

ミリアは豚肉といくつかの野菜を取り出す。それから瓶に溜まつた水を鍋に掬い、指輪の力で清潔に変えてから、食材を洗う。

「姉様つて普段、神様のことが憎い憎いって言つてるけど、これでもかつてくらい指輪の力を使い倒してくるよね……」

「悪い？ 私はもらえるものは銅貨一枚だつても

らうし、借りられるものは猫の手だつて借りる主義なの」

「悪くはないよ。業突く張りつてか、逞たくましいなつて思うけど」

「将来、この国を立派に治める、女王の器つて言つて頂戴」

「すぐ自分をいい方に言つてアピールするのも、王族向きの性格だよね……」

フイーナは呆あきれ顔になつたが、背を向けているミリアには見えない。

軽口を応酬している間にも、ミリアは包丁で食材を豪快に切つて、適当にフライパンへ放り込んで、

炒め始めた。そのフライパンさばきはまさに大胆
そのものだつた。

「お姉ちやんて、見た目だけは美少女なのにね
⋮⋮⋮」

「姉の凄^{すさまじ}い料理姿を見て、フイーナが嘆息した。
「ん？ よく聞こえなかつたけど、フイーナは朝
ご飯要らないつて？」

「中身はもはや聖女つて言つたの！」

「何よ、この子つたら。お世辞なんて覚えてやあ
ねえ。ヲホホホホ」

「ハア⋮⋮⋮」

ミリアの上機嫌な笑い声の中に、フイーナの新

たな嘆息がこつそり消えた。

「はい、できたわよ。しつかり食べていいなさい」
ミリアは豚肉と野菜を塩コショウで炒めただけの、豪快な料理を皿に盛つて出してやる。
しかし、フイーナは物言いたげな視線を落とすばかりで、手を付けようとしない。

「何よ？」

「……女の子の朝食つて感じじゃないよね、コレ」「まーたあんたは！」だから、文句言うなつて最初に釘差したのにっ

ミリアは目を尖らせた。

「い、い？　このブタさんも！　キャベツさん

も！ ニンジンさんも！ 大昔、うちの王家に世話になつたからつて、未だに恩に思つてくれる感心な農家さんが、届けてくれたものなのよ？ それに文句つけたらあんた、餓死する呪いがかかるわよっ」

「食材じやなくて、調理法に文句言つてるのになあ……」

まあいいわよ、みたいな渋々態度でフイーナは皿にフォークを伸ばした。

「あたしも料理できるよう、練習しようかなあ

⋮⋮⋮

「あんたはそんなどしなくていいの。私と違つ

て頭がいいんだから。先生シとこでみつちり勉強して、将来の私を支える名臣になってくれなきや」

「ハイハイ姉様のためにね」

フイーナは嫌み口調で言つたが、結局、気づけばぺろつと平らげていた。

こいつだつて食べ盛りの年頃なのだ。

フイーナは、皿は自分で洗おうとした。

「それも私がやつとくから。あんたは早く行きなさいつてば」

「姉様つてホントは優しいよね。世話焼きつてい
うか」

「ハア？ 回り回つて私自身のためよ。あんたが

さつき言つたばかりでしょ？」

ミリアは取り合わず、自分の皿を平らげるのに忙しかつた。

我ながら塩加減が絶妙！　と悦に入つてゐる。

「じやあ、行つてきまーす」

フイーナはそう言つたが、なぜか突つ立つたまま、窓の外をしげしげと見ていた。

この厨房は、中庭の一つにつながつてゐる。

「光輝満つる園」という大仰な名で、百年前には盛んに園遊会だの晩餐会だのが開かれていたと、亡き祖父が言つていた。

しかし今は、一面の雑草で覆われるばかり。

どれも丈が高く、しかも強靭無比で、あたかも人の進入を拒んでいるかのよう。

それらを見回してか、フイーナがコメントする。

「雑草、また伸びたねー」

「春だもの、そりや伸びるでしょ」

「冬の間に抜かなくてよかつたの?」

「手が回らなかつたのよ! どうせもう誰も使やしないんだし、放置よ放置」

「でも、外の壁にラクガキされたら、必死で消してるじやない」

「あそこは民の目につくんだから当然でしそうがつ。無様なトコは見せらんないわよつ」

同様の理屈で、前庭だけはしつかり芝生も整え、手入れをしていたり。

「でも、王宮の奥なんて誰も入つてこないんだから、汚城おしろになつてようが汚庭おにわになつてようが、一向に構やしないわよ！」

「姉様つて見栄つ張りだよねー……」

「私はそんな低次元の話をしてんじゃない！」

ミリアは食事を中断し、居住まいさえ正して懇々と諭した。

「あんたはイマイチわかつてないようだから、はつきりと言うわよ？

私はもうこれ以上、このアーダヴァアイレルト家
が舐められるのは、ガマンならないの。

そして、この私の代のうちに、必ず王家の権威
を復活させる！

それがこの私に、ご先祖様たちが与えた使命よ」

エーエンケスターは小国である。

町の数もこの王都を合わせ、たつた四つしかない。
それでも、とても栄えた土地だつた。

そもそもが中央大陸アルルーカーントから玄関口になる交易の
要衝だし、都の周りは森林資源が豊かだし、ポラ
リス沃野よくやが実らせん農作物と、タタン鉱床を中心

とする重工業、さらにはヴェステルの温泉街で活発な観光業が、国土面積以上の繁栄を王家にもたらしてくれた。

代々の王もまた、善政を敷いてさらに国と民を富ませ、周辺諸国には毅然とにらみを利かせて侵略など許さなかつた。

ミリアとフイーナにも、そんな賢王たちの血が流れているのだ。

彼らの裔すえとして、アーダヴァイレルト王家を盛時の姿に戻すのは義務であり、決して不可能ではないはずだ！

果たして、フイーナは答えた。

「うん……私だってわかってるよ、姉様。だから、いくらでも協力するつもりだし——」

そう言ってくれつゝも、この賢明な妹は、やはり窓の外へ視線を向けたままだつた。物憂げな横顔のままだつた。

「でも、姉様？　じゃあ……あれはいいの？　許していいの？」

窓から中庭を指すフイーナ。

さつきからいつたいなんだといふのか？　いつたいそこに何があるといふのか？

ミリアは席を立つと、己の目で確認した。

伸び放題の、丈の高い雑草の陰で――

近所の悪ガキどもが、かくれんぼしていた。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアツ、ほつかむり姫が出たああああああああああああああああああ!?」

「逃げろ！ 食われるぞ！」

「どうあれが、ほつかむり姫よ！」
あと『狼が出た！』みたいなノリで言うな！」

ミリアはもう勝手口から飛び出すると、悪ガキど

もを追い回したのだつた。

+

—— という大騒動の後である。

「ホントにやんなつちやうわ。あいつら、王宮を遊び場だと勘違いしてんのかしら？まあ、汚城に汚庭じやしようがないけど！」

ミリアはブツクサこぼしながら、三階にある自分の部屋に帰つた。

この城は数百年前に、伝説の開祖ランベーシュ・アーダヴァイレルトが造らせたものだから、建物

자체는 단정한 편이다.

古徽^{かび}ていて、くたびれたまま修繕できていないけれど、まあ味よ、味。

従つてミリアの自室も、王女の部屋に相応しい広さを持つ。庶民の家ならば、一軒分くらいは余裕であるだろう。

調度品だつて安物に入れ替えられてはいるが、一通りはそろつている。

ミリアはこの後、公務があり、着替えのために戻つたのだが、

「……ナニコレ？」

部屋の中に入つてびっくり。

床に矢がぶつすり刺さっているのである。矢羽がいつそ神々しいほどに真っ白だつた。

思わず窓を確かめるミリア。

起床後、一度開けるも、出る前にちゃんと閉めていつたはずの木戸は、そのままだつた。

だつたらこの矢は、どこから飛んできたのか？

しゃがみ込んで、矯めつ眇めつ眺める。

「まさか、あいつらの仕業!?」

脳裏に浮かんだのは、さつき散々に追い回した悪ガキども。

「イタズラにしても物騒ね！ しかも乙女の部屋にまで侵入して！ 今度会つたら、もう二度とで

きないくらい、とつちめてやらなきやつ」「ミリアは鼻息荒く、ふんずと床から矢を引き抜くと、怒りに任せてベキベキに折つて、ゴミ箱へ思クソ叩たたき込んだ。

それから着替えて、何事もなかつたかのように謁見の間へ向かう。

病床の父王に代わつて、民の陳情を聞いてやるのだ。

彼らはこのご時世でもまだ、王家の権威を認め、助力をすがる殊勝な者たちである。

無下にするわけにはいかない。

それに、こういった日々の地道な活動によつて、

評判が評判を呼んで、いつかは王権復古に繋がる
と信じている。

女官のお仕着せのままでは舐められるから、一
張羅のドレスでバツチリ着飾つた。

ほつかむりも取り払つた。

「いざ出陣！」

自室の出入り口の扉を、勢いよく開けるミリア。
勇ましく一步を踏み出そうとして——また妙な
ものを見つけた。

「んんんっ？？？」

部屋の真ん前、廊下の床に白羽の矢が、ぶつす
り刺さっていたのである。

「さつきまでこんなのがかつたわよ!」

怪訝そうにしつつも、また怒りに任せて引き抜き、

ベキ折つて捨てる。

「こう執拗で悪質だと、イタズラの範疇を超えて
んじやないのよ!」

憤懣する方なかつたが、謁見の時間が押していく。
イタズラの犯人探しと成敗は後回しにして、廊下をドスドス歩いていく。

しかし、角を曲がった先で、またも白羽の矢が
壁に刺さつていた。

「邪魔よ!」

ミリアは一瞬の力技で抜き捨て、先を急ぐ。

しかし、また廊下の角を曲がると、床に矢が。
その先にも天井に矢が……。

「いい加減にしろー！」

行く先々にぶつ刺さつている矢を、ミリアはちぎつては投げ、ちぎつては投げして進む。

そして、廻り階段にたどり着くと――

数えきれないほどの矢が、踏板という踏板に刺さつていた。

ミリアは憤怒^{ふんぬ}で声にならない絶叫を上げると、もはや鬼神もかくやに矢を抜きまくった。

「ぜい……ぜい……」

ミリアは肩で息をしながら、謁見の間に到着する。恐る恐る中を覗くと、もう矢は刺さつていなかつた。

(ホントに!? ホントに!?)

疑心暗鬼に駆られ、神経質なまでにあちこちを見回すが、一本も確認できない。

ホツと胸を撫^なんで下ろすと、ようやくいつもの調子を取り戻した。

「ごめんなさい、ちよつと遅れたわ」

謝罪とともにに入室し、ミリアは玉座にふんぞり返る。

この豪奢な椅子だけは売り払わずにとつてあるし、謁見の間と、正面玄関からここまで続く廊下だけは、内装の手入れと修繕を完璧にしてある。

フイーナが言うところの、「見栄つ張りの極致」みたいなゾーンである。

隣には、今やこの国で唯一の大臣が立つ。

父国王の親友で、同じ年の四十三歳。

有能なのに友情価格で働いてくれる、ミリアにとつても恩人だ。

「今日の陳情は三組『だけ』です、姫」「なるほど、三組『も』我が王家に助けを求めてる民がいるわけね！」

「……最初のひとりに入つてもらいましょう」「いいわ、じゃんじゃん持つてきなさい！ 特別に会つてあげる」

ドヤ顔でうなずくミリア。

出入り口に立つていた二人の儀仗兵ぎじょうへいが、鍛えられた喉のどで口上を述べる。

「国王陛下御代理ミリア王女殿下、ご謁見えきみツ！」

それから二人で建て付けの悪い両開きの大扉を、

必死こいて——だけど澄まし顔で隠して——ゆつ
ぐりと開けていつた。

最初のひとりが姿を見せる。

「むつ」

とミリアは目を瞠みはる。

同じ年くらいの少年だつた。しかもかなりの美形。
ただ、表情がなんといふか……くたびれたオツ

サンみたいな氣怠い感じなのだ。
(只者ただものじやあないわね)

そのチグハグな印象に、ミリアは確信めいたもの抱いた。

父に代わり、謁見を始めてもう一年。

その間に様々な人種、職種の者たちと会い、言葉を交わし、人を見る目は肥えたという自負が、ミリアにはある。

「ようこそいらっしゃいました——」
ミリアは相手がたとえ王侯でも失礼がないよう^もな、最敬礼を以つて会釈をした。

「——父の代理を務めております、この国的第一王女。ミリアル・ジユ・カレンシア・アーダヴァイレルト・エインケスターですわ。どうぞ、お見知りおきを」

フイーナが見ていたら、鳥肌を立てるだろうくらいの猫を被る。^{かぶる。}

平民上がりの母親の影響で、普段は町娘みたいな言葉遣いをしている（あと、態度も）ミリアだが、その気になればいくらでも王女然と振る舞えるのだ。

教育を受けていたのだ。
すると、少年も受け答えした。

こつちが最敬礼をしてやつたのに、あつちは無礼スレスレのざつくばらんさで、

「よお、初めまして。俺^{おれ}の名前はリクドー。知つ

てると思うけど一応、神の端くれだ」
「出でけつ」

ミリアは一切の逡巡なく、出入り口を全力で指した。

いきなりのことには、リクドーと名乗った少年は目を丸くしていたが、知つたことではない。

（よりもよつてこのあたしの前に？ 神を自称する生物が出てくるとか？ いい度胸じやないのよ、コノヤロヽヽヽヽヽヽツ）

積もりに積もつた怨念のあまりに、瞳孔が開ききつたような異様な目付きをしてしまう。

呪詛のような眼差しを浴びせまくってしまう。

それでリクドーとやらはたじたじになりつつも、

「あ、いや、出てくわけにはいかねえんだよ」
などと、来意の説明を始めた。

「新たなヴェステルの巫女を迎えてきたんだよ。
信じられねえかもしんないけど——ミリアルージ
ユ姫。あんたがその巫女に選ばれたんだ。この矢
に見覚えがあるだろ？」

などと、いきなり白羽の矢を取り出してみせた。
「あれ、あんたのイタズラだつたの!?」

ミリアはもう怒りのあまり、前のめりになつて
腰を浮かしてしまった。

「え？　いや、別にイタズラつてわけじゃ——」
「出でいつて」

ミリアは同じ言葉を、今度は冷ややかに言い放つた。リクドーが「そんなバカな」とアホ口を開けていたが、一切の斟酌しんしゃくはなく、氷の笑顔でお引き取り願つたのである。